

魚服記

太宰治

青空文庫

本州の北端の山脈は、ぼんじゅ山脈というのである。せいぜい三四百メートルほどの丘陵が起伏しているのであるから、ふつうの地図には載っていない。むかし、このへん一帯はひろびろした海であつたそうで、義経が家来たちを連れて北へ北へと亡命して行つて、はるか蝦夷の土地へ渡ろうとここを船でとおつたということである。そのとき、彼等の船が此の山脈へ衝突した。突きあつた跡がいまでも残っている。山脈のまんなかごろのこんもりした小山の中腹にそれがある。約一畝歩ぐらしいの赤土の崖がけがそれなのであつた。

小山は馬まはげ禿山やまと呼ばれている。ふもとの村から崖を眺めるとはしっている馬の姿に似ているからと言うのであるが、事實は老いぼれた人の横顔に似ていた。

馬禿山はその山の陰の景色がいいから、いつそう此の地方で名高いのである。麓ふもとの村は戸数もわずか二三十でほんの寒村であるが、その村はずれを流れている川を二里ばかりさかのぼると馬禿山の裏へ出て、そこには十丈ちかくの滝がしらく落ちてゐる。夏の末から秋にかけて山の木々が非常によく紅葉するし、そんな季節には近辺のまちから遊びに来る

人たちで山もすこしにぎわうのであった。滝の下には、ささやかな茶店さえ立つのである。ことしの夏の終りごろ、此の滝で死んだ人がある。故意に飛び込んだのではなくて、まったくの過失からであった。植物の採集をしにこの滝へ来た色の白い都の学生である。このあたりには珍らしい羊齒類しだが多くて、そんな採集家がしばしば訪れるのだ。

滝壺は三方が高い絶壁で、西側の一面だけが狭くひらいて、そこから谷川が岩を嘯かみつつ流れ出ていた。絶壁は滝のしぶきでいつも濡れていた。羊齒類は此の絶壁のあちこちにも生えていて、滝のとどろきにしじゅうぶるぶるとそよいでいるのであった。

学生はこの絶壁によじのぼった。ひるすぎのことであつたが、初秋の日ざしはまだ絶壁の頂上に明るく残っていた。学生が、絶壁のなかばに到達したとき、足だまりにしていた頭ほどの石ころがもろくも崩れた。崖から剥はぎ取られたようにすつと落ちた。途中で絶壁の老樹の枝にひっかかった。枝が折れた。すさまじい音をたてて淵ふちへたたきこまれた。

滝の附近に居合せた四五人がそれを目撃した。しかし、淵のそばの茶店にいる十五になる女の子が一番はつきりとそれを見た。

いちど、滝壺ふかく沈められて、それから、すらつと上半身が水面から躍りあがつた。眼をつぶって口を小さくあけていた。青色のシャツのところどころが破れて、採集かばん

はまだ肩にかかつていた。

それきりまたぐつと水底へ引きずりこまれたのである。

二

春の土用から秋の土用にかけて天気の良い日だと、馬禿山から白い煙の幾筋も昇っているのが、ずいぶん遠くからでも眺められる。この時分の山の木には精気が多くて炭をこさえるのに適しているから、炭を焼く人達も忙しいのである。

馬禿山には炭焼小屋が十いくつある。滝の傍にもひとつあった。此の小屋は他の小屋と余程はなれて建てられていた。小屋の人がちがう土地のものであったからである。茶店の女の子はその小屋の娘であつて、スワという名前である。父親とふたりで年中そこへ寝起しているのであつた。

スワが十三の時、父親は滝壺のわきに丸太とよしらずで小さい茶店をこしらえた。ラムネと塩せんべいと水無飴みずなしあめとそのほか二三種の駄菓子をそこへ並べた。

夏近くなつて山へ遊びに来る人がぼつぼつ見え初めるじぶんになると、父親は毎朝その

品物を手籠てかごへ入れて茶店迄まではこんだ。スワは父親のあとからはだしでばたばたついで行つた。父親はすぐ炭小屋へ帰つてゆくが、スワは一人いのこつて店番するのであつた。遊山の人影がちらとでも見えると、やすんで行きせえ、と大声で呼びかけるのだ。父親がそう言えと申しつけたからである。しかし、スワのそんな美しい声も滝の大きな音に消されて、たいていは、客を振りかえさすことさえ出来なかつた。一日五十銭と売りあげることがなかつたのである。

たそがれとき 黄昏時になると父親は炭小屋から、からだ中を真黒にしてスワを迎えに来た。

「なんぼ売れた」

「なんも」

「そだべ、そだべ」

父親はなんでもなさそうに呟つぶやきながら滝を見上げるのだ。それから二人して店の品物をまた手籠へしまい込んで、炭小屋へひきあげる。

そんな日課が霜のおりるころまでつづくのである。

スワを茶店にひとり置いて心配はなかつた。山に生れた鬼子であるから、岩根を踏みはずしたり滝壺へ吸いこまれたりする氣づかないのであつた。天氣が良いとスワは裸

身になって滝壺のすぐ近くまで泳いで行った。泳ぎながらも客らしい人を見つけると、あちやけた短い髪を元氣よくかきあげてから、やすんで行きせえ、と叫んだ。

雨の日には、茶店の隅でむしろをかぶって昼寝をした。茶店の上には檜かしの大木がしげつた枝をさしのべていい雨よけになった。

つまりそれまでのスワは、どうどうと落ちる滝を眺めては、こんなに沢山水が落ちてはいつかきつとなくなつて了しまうにちがない、と期待したり、滝の形はどうしてこういうのも同じなのだろう、といぶかしがったりしていたものであった。

それがこのごろになって、すこし思案ぶかくなつたのである。

滝の形はけつして同じでないということを見つけた。しぶきのはねる模様でも、滝の幅でも、眼まぐるしく変つているのがわかった。果ては、滝は水でない、雲なのだ、ということも知つた。滝口から落ちると白くもくもくふくれ上る案配からでもそれと察しられた。だいいち水がこんなにまでしろくなる訳はない、と思つたのである。

スワはその日もぼんやり滝壺のかたわらに佇たたずんでいた。曇つた日で秋風が可成りいたくスワの赤い頬を吹きさらしているのだ。

むかしのことを思い出していたのである。いつか父親がスワを抱いて炭すみ窯がまの番をしな

がら語ってくれたが、それは、三郎と八郎というきこりの兄弟があつて、弟の八郎が或る日、谷川でやまべというさかなを取つて家へ持つて来たが、兄の三郎がまだ山からかえらぬうちに、其のさかなをまず一匹焼いてたべた。食つてみるとおいしかった。二匹三匹とたべてもやめられないで、とうとうみんな食つてしまった。そうするとのが乾いて乾いてたまらなくなつた。井戸の水をすつかりのんで了つて、村はずれの川端へ走つて行つて、又水をのんだ。のんでるうちに、体中へぶつぶつと鱗うろこが吹き出た。三郎があとからかけた時には、八郎はおそろしい大蛇だいじやになつて川を泳いでいた。八郎やあ、と呼ぶと、川の中から大蛇が涙をこぼして、三郎やあ、とこたえた。兄は堤の上から弟は川の中から、八郎やあ、三郎やあ、と泣き泣き呼び合つたけれど、どうする事も出来なかつたのである。スワがこの物語を聞いた時には、あわれであわれで父親の炭の粉だらけの指を小さな口におしこんで泣いた。

スワは追憶からさめて、不審げに眼をぼちぼちさせた。滝がささやくのである。八郎やあ、三郎やあ、八郎やあ。

父親が絶壁の紅い蔦の葉を掻かきわけながら出て来た。

「スワ、なんぼ売れた」

スワは答えなかった。しぶきにぬれてきらきら光っている鼻先を強くこすった。父親はだまって店を片づけた。

炭小屋までの三町程の山道を、スワと父親は熊笹を踏みわけつつ歩いた。

「もう店しまうべえ」

父親は手籠を右手から左手へ持ちかえた。ラムネの瓶がからから鳴った。

「秋土用すぎで山さ来る奴もねえべ」

日が暮れかけると山は風の音ばかりだった。榎ならや樅もみの枯葉が折々みぞれのように二人のからだへ降りかかった。

「お父ど」

スワは父親のうしろから声をかけた。

「おめえ、なにしに生きでるば」

父親は大きい肩をぎくつとすぼめた。スワのきびしい顔をしげしげ見てから呟いた。

「判らねじや」

スワは手にしていたすすきの葉を噛みさきながら言った。

「くたばった方あ、いいんだに」

父親は平手をあげた。ぶちのめそうと思つたのである。しかし、もじもじと手をおろした。スワの気が立つて来たのをとうから見抜いていたが、それもスワがそろそろ一人前のおんなになつたからだな、と考へてそのときは堪忍してやつたのであつた。

「そだべな、そだべな」

スワは、そういう父親のかかりくさのない返事が馬鹿くさくて馬鹿くさくて、すすきの葉をべつべつと吐き出しつつ、

「阿呆、阿呆」

と嘔鳴どなつた。

三

ぼんが過ぎて茶店をたたんでからスワのいちばんいやな季節がはじまるのである。

父親はこのころから四五日置きに炭を脊負つて村へ売りに出た。人をたのめばいいのだけれど、そうすると十五銭も二十銭も取られてたいしたついでであるから、スワひとりを残してふもとの村へおりて行くのであつた。

スワは空の青くはれた日だとその留守に蕈きのこをさがしに出かけるのである。父親のこさえる炭は一俵で五六銭も儲もうけがあればいい方だったし、とてもそれだけではくらせないから、父親はスワに蕈を取らせて村へ持つて行くことにしていた。

なめこというぬらぬらした豆きのこは大変ねだんがよかった。それは羊齒類の密生している腐木へかたまつてはえているのだ。スワはそんな苔を眺めるごとに、たった一人のもだちのことを追想した。蕈のいっばいまつた籠の上へ青い苔をふりまいて、小屋へ持つて帰るのが好きであった。

父親は炭でも蕈でもそれがいい値で売れると、きまつて酒くさいいきをしてかえつた。たまにはスワへも鏡のついた紙の財布やなにかを買つて来て呉れた。

凧こがらしのために朝から山があれて小屋のかけむしろがにぶくゆすられていた日であった。父親は早暁から村へ下りて行つたのである。

スワは一日じゆう小屋へこもつていた。めずらしくきようは髪をゆつてみたのである。ぐるぐる巻いた髪髪の根へ、父親の土産の浪模様がついたたけながをむすんだ。それから焚た火きびをうんと燃やして父親の帰るのを待った。木々のさわぐ音にまじつてけだものの叫び声声が幾度もきこえた。

日が暮れかけて来たのでひとりで夕飯を食った。くろいめしに焼いた味噌をかてて食った。

夜になると風がやんでしんしんと寒くなった。こんな妙に静かな晩には山できつと不思議が起るのである。天狗の^{てんぐ}大木を伐り倒す音がめりめりと聞えたり、小屋の口あたりで、誰かのあずきをとぐ気配がさくさくと耳についたり、遠いところから^{やまふと}山人の笑い声はつきり響いて来たりするのであった。

父親を待ちわびたスワは、わらぶとん着て炉ばたへ寝てしまった。うとうと眠っていると、ときどきそつと入口のむしろをあけて^{のぞ}覗き見するものがあるのだ。山人が覗いているのだ、と思つて、じつと眠つたふりをしていた。

白いものちらちら入口の土間へ舞いこんで来るのが燃えのこりの焚火のあかりでおぼろに見えた。初雪だ！と夢心地ながらうきうきした。

^{とつ}疼痛。からだがしびれるほど重かった。ついであのくさい呼吸を聞いた。

「阿呆」

スワは短く叫んだ。

ものもわからず外へはしつて出た。

吹雪！ それがどつと顔をぶつた。思わずめためた坐つて了つた。みるみる髪も着物もまつしろになつた。

スワは起きあがつて肩であらく息をしながら、むしむし歩き出した。着物が烈風で揉もくちやにされていた。どこまでも歩いた。

滝の音がだんだんと大きく聞えて来た。ずんずん歩いた。てのひらで水みず漬ばなを何度も拭つた。ほとんど足の真下で滝の音がした。

狂い唸うなる冬木立の、細いすきまから、

「おど！」

とひくく言つて飛び込んだ。

四

気がつくときあたりは薄暗いのだ。滝の轟とどろきが幽かすかに感じられた。ずっと頭の上でそれを感じたのである。からだがその響きにつれてゆらゆら動いて、みうちが骨まで冷たかつた。

ははあ水の底だな、とわかると、やたらむしようにすつきりした。さっぱりした。

ふと、両脚をのぼしたら、すすと前へ音もなく進んだ。鼻がしらがあやうく岸の岩角へぶつつかろうとした。

大蛇！

大蛇になってしまったのだと思った。うれしいな、もう小屋へ帰れないのだ、とひとりごとを言つて口ひげを大きくうごかした。

小さな鮒ふなであったのである。ただ口をぱくぱくとやって鼻さきの疣いぼをうごめかしただけのことであつたのに。

鮒は滝壺のちかくの淵をあちこちと泳ぎまわつた。胸むな鰭なびれをびらびらさせて水面へ浮んで来たかと思うと、つと尾鰭をつよく振つて底深くもぐりこんだ。

水のなかの小えびを追っかけたり、岸辺の葦あしのしげみに隠れて見たり、岩角の苔をすすったりして遊んでいた。

それから鮒はじつとうごかなくなつた。時折、胸鰭をこまかくそよがせるだけである。なにか考えているらしかつた。しばらくそうしていた。

やがてからだをくねらせながらまつすぐに滝壺へむかつて行つた。たちまち、くるくる

と木の葉のように吸いこまれた。

青空文庫情報

底本：「晩年」新潮文庫、新潮社

1947（昭和22）年12月10日初版1刷

1985（昭和60）年10月5日70刷改版

1987（昭和62）年11月25日75刷

初出：「海豹」

1933（昭和8）年3月号

入力：中嶋壯一

校正：鈴木厚司

2003年4月9日作成

2013年4月6日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

魚服記

太宰治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>